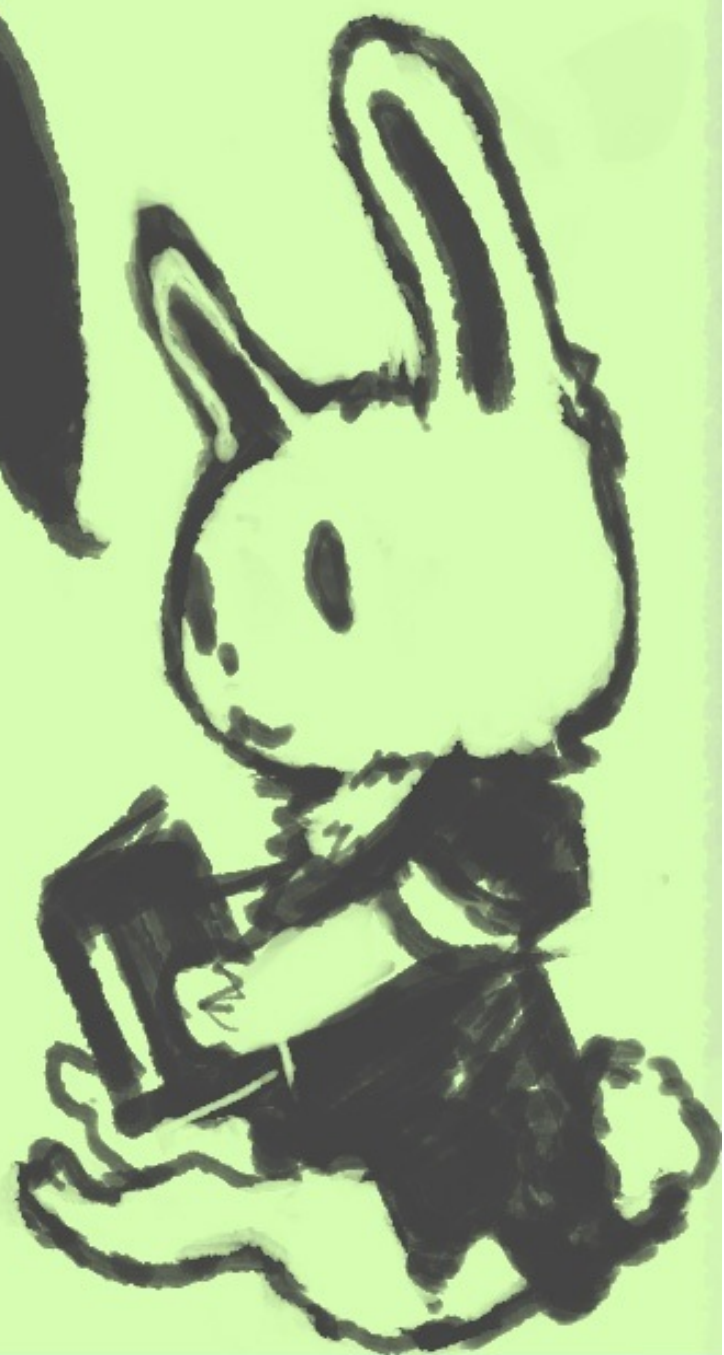


めぐぴよんの
エッセイ2



著者：めぐぴよん

飾らない言葉で書いた
エッセイ

見えない場面

学生時代までは、めちゃくちゃに映画を見まくっていた。
このごろは、なかなか行く機会がない。

デジタルリマスターというのができるようになって、
古い映画を見る機会が増えたのはうれしい。

そのなかで、わたしにとって謎の映画が2本ある。

一本は邦画で「砂の器」。

サントラレコードを買って何度も聞いた。

この中で、わたしがあと思っていたシーンが、なかったのだ。

森田健作率いる刑事たちが線路の周りの草を捜索しているシーン。あれは何だったのだろう。

もう1本は洋画で「ローマの休日」

お姫様が髪をカットして美容院をでてから、周りの人たちの服装を見て、
長袖のブラウスの袖を破りにとって半袖にしてしまうシーン。

次のシーンでは確かに半袖になっているのに、不思議でたまらない。

それだけ、映画にのめり込んで想像もまじえながら時間を過ごしてたという事なのか。

不思議なシーンは、わたしのなかでは、くっきりと今も残っているのだ。

友人と「タイタニック」を見に行ったとき、終わってから泣いている友人を相手に
「あそこのシーンは、こうあるべきでしょ」
「あの展開からいって、おかしいでしょ」
と文句ばかり言っていたら、
「もう！監督目線で見るのはやめてよ！せっかく感動したのに」
と怒られたことがあった。

いつからだろう、「わたしならこうする」と思いながら映画を見るようになったのは。

もともと映画で泣くことはほとんどない性格で冷静に見てしまうのだが。

映画を見て泣く人がうらやましい。

どうやったら、観客目線を取り戻せるのだろうか・・・